祭祀碑に注目して、その残存率や立碑時期などについて検討してみたい。まずは筆者が実見した帝陵での祭祀碑の残存するものを列挙すれば、以下の通りである。

漢文帝覇陵：所在地は陝西省西安市覇陵区毛窰院村。康熙七年・同三七年・雍正元年・乾隆一四年・同二〇年・同二五年・同二七年・嘉慶二四年及び年次不詳の清代祭祀碑九基が残存する。その他に方形基座のみが一六基残存する。

漢宣帝杜陵：陝西省西安市曲江郷三兆村。康熙七年碑二基・雍正三年・乾隆三年の清代祭祀碑四基が残存する。

唐高祖献陵：陝西省三原県徐木郷永合村。康熙二七年の祭祀碑一基のみが残存する。

唐太宗昭陵：陝西省礼泉県烟霞・趙鎮・北屯郷。宋代以降の祭祀碑一三基が残存するが、明成化元年「御製祝文」碑・清乾隆一四年「御製祝文」碑以外は、ほとんどは摩滅や倒壊のため、年次は判読不能。

後周世宗慶陵：河南省新鄭県郭店郷陵上村。歴代の祭祀碑四四基が残存する。うち九基は陵上村民に持ち去られて村内で二次利用されており、陵前に現存する最古碑は明宣徳元年碑、最新碑は清宣統二年碑で、明嘉靖・万暦年間の祭祀碑が多数を占める。

北宋八陵：河南省鞏義市西南芝田鎮。太祖永昌陵前に明正徳元年立の「祭祀祝文」碑のみが現存する。（明代二四回、清代二四回祭告がなされたことが明嘉靖『鞏県志』・清乾隆『鞏県志』に見える）。

かく見てくると、後周世宗柴栄の慶陵の祭祀碑が突出して多いのに気付く。五代最後の後周の二代目で、在位はわずか六年でありながら、その後の宋の統一の先鞭をつけたことから、世宗柴栄に対する後世の史家の評価は高いが、それにも増して彼を有名にしたのは元末明初に成立したとされる白話小説『水滸伝』であると考えられる。『水滸伝』には世宗柴栄の嫡流の子孫である小旋風柴進なる人物が登場し、多くの無頼を邸に匿い、官憲の手が及ばんとすると、宋朝より賜った「丹書鉄券」を示して撃退するという痛快な役割を果たすのである。庶民レベルにおいても絶大な読者を獲得した『水滸伝』の影響こそが、慶陵前の祭祀碑の多さの最大の背景であろう。明代以降のものがほとんどを占めるのも、このように解釈することで了解できよう。

二〇〇四年度 史学研究会総会の記録

間野氏は、インド・ムガル朝の創始者であるバーブルの回想録『バーブル・ナーマ』について概観し、四〇年におよぶ御自身の研究・校訂・訳注の過程を跡づけ、今後の課題を提示された。愛宕氏は、綿密な踏査に基づき、秦始皇帝陵から清西陵にいたる五三陵の現状を紹介し、陵前に建てられた祭祀碑が各皇帝の後世評を示していることを明らかにされた。お二人とも長年にわたる研究の成果と方法をわかりやすく語り、参加者に大きな感銘を与えられた。

両講演の間に総会が行なわれた。まず紀平英作理事長が挨拶した後、江川温氏を司会者に選出し、庶務・編集・会計に関する報告・審議がなされた。

庶務（吉川真司常務理事）からは、①開かれた学会をめざして会則を一部改正すること、②来年度から学生会員の会費割引制

度を設けること（次欄参照）、③来年度から広報担当常務理事・委員を設置すること、の三点が提案され、承認された。このほかホームページ改修や会員名簿作成にむけての取り組みについても報告があった。

編集（上原真人常務理事）からは、『史林』の刊行状況、および特集号「歴史学の現在 二〇〇五」（本号）の編集状況について報告があった。

会計（田中和子常務理事）からは、二〇〇四年度決算報告、および二〇〇五年度予算案が提案され、承認された。このほか予算・決算の書式改善や会費滞納者の取り扱いについても報告があった。

総会・公開講演ののち、鎌田元一理事が閉会の辞を述べ、大会は終了した。

学生会員の会費割引制度について

史学研究会では、二〇〇五年度（二〇〇五年四月～〇六年三月）より、学生会員の会費割引制度を設けることにしました。

○学生会員とは、次の①②のいずれかに該当する会員を指します。

①学部学生・大学院生

②研修員・研究生・聴講生・科目等履修生など①に準ずる身分の者（非常勤講師・研究員等の職を有する者を除く）

○学生会員は、一般六九〇〇円の会費を、三九〇〇円に割引します。

すでに会員であって二〇〇五年度から学生会員扱いを望まれる方は、年度初めにお送りする会費振込用紙を用いて、所定の届け出をしてください。また、学生会員として新たに入会することを希望される方は、入会届を御請求ください。

この制度によって、多数の院生・学生のみなさんに御入会いただき、史学研究会の活動が発展することを願うものです。

受贈誌

（二〇〇四年七月六日～二〇〇四年一一月一五日）

アジア研究所報（亜細亜大学アジア研究所）一一五

史迹と美術（史迹と美術同攷会）七四六～七四八

福島大学教育学部論集　社会科学部門（福島大学教育学部）七二～七三

Historia Mexicana (El Colegio De Mexico) 二一三

人文地理（人文地理学会）五六―三

日本史研究（日本史研究会）五〇三～五〇五

日本歴史（日本歴史学会）六七五～六七七

古代文化（古代学協会）五六―七～九

一橋論叢（一橋大学一橋学会）一三二―一～三

国立歴史民俗博物館研究報告（国立歴史民俗博物館）一二一

史学雑誌（史学会）一一三―六～九

歴史学報（歴史学会）一八三

歴史（東北史学会）一〇三

信濃（信濃史学会）五六―七～一〇